

目の前の目標に向かってこつこつと。その先に未来は開ける

株式会社 日立フーズ&ロジスティクスシステムズ

高城 茉那さん TAKAGI MANA

埼玉県生まれ。東京都足立区で育つ。都立両国高等学校卒業。2008年東京理科大学工学部応用生物科学科入学。2014年同修士課程修了。株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズ入社。産休育休を経て2022年4月復帰。現在に至る。

※2023年4月 工学部応用生物科学科は、創域工学部生命生物科学科に名称変更しました。



将来なりたいものはなく、自分が何かになれるという自信もなかった

株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズで、システムエンジニアとしてキャリアを築いている高城茉那さん。クライアントから依頼を受けて、人の手でアナログ的に行われている業務をシステム化し、働く人たちを楽にしたり、会社の業務を効率化して、利益向上につなげていく。それがシステムエンジニアの仕事だ。

高城さんの仕事は、クライアント企業と話し合いを重ね、今、何に困っているか、それをシステムでどのように解決したいかニーズを聞き出し、それをシステム設計書という形にすること。設計書に沿ってプログ

ラマーが組んだプログラムをチェックし、テスト稼働を繰り返し、最終的に完成したシステムを納品するのも高城さんの仕事だ。

「納品したシステムが無事稼働するまでは、はらはらし通しです。でも、うまく稼働してお客様から『使いやすい』『便利になった』と言ってもらえると、とても達成感がありますし、やりがいを感じますね」と高城さん。そんな高城さんだが、もともとシステムに詳しくなかったわけではなく、自らの強い意志でこの世界に入ったわけでもなかった。

「子どもの頃から自分に自信がなく、将来何になりたいという夢もなかった。自分が何かになれると想像したことがなかった」という。そんな高城さんが、なぜシステムエンジニアになったのか、その足跡を聞いてみた。

部活に熱中した中高時代 高3からの猛勉強で大学受験をクリア

生まれは埼玉県の草加市。小学校4年生のときに東京都足立区に引っ越した。両親は、自営業。祖父が創業したプラスチック工場を家族で経営していた。子どもの頃から働く両親の姿が身近にあり、会社を継ぐ気はなかったものの、自分も将来は何か仕事をしなければならぬという意識はあった。きょうだいは3



7歳頃に家族で旅行した時の写真

歳下の妹が一人。両親には、子どもに多様な体験をさせたいという想いがあり、週末にはいろいろなところに連れて行ってもらった。親戚みんなで旅行することもあり、子ども時代は楽しかった思い出が多い。

中学は地元の公立校に進学。剣道部に入ったが、たまたま強豪校だったため、この時期の部活は「最も過酷な思い出」。だが、一人では弱くても、団体戦でみんなと勝ち上がっていく面白さを知ったのも剣道だった。

高校は墨田区の都立両国高校に進学。剣道が個人競技だったので今度は団体競技をやりたいと思いハンドボール部に。強いチームではなかったが、熱心に練習に励んでいた。進路を意識したのは、高校で生物の先生に出会ってから。

「授業が面白くて、生物をもっと学びたいと思うようになりました」と高城さん。しかし、部活に熱中していたため、勉強はあまりしてこなかった。塾に行ったこともなく、部活を引退後、見学に行った塾では「この成績ではどこにも行けない」と言われてしまう。すぐに塾に通い始め、高3のときには朝から晩まで勉強漬けの日々をすごした。努力がかなって、第一志望だった東京理科大学理工学部合格。野田キャンパスに通うことになった。

勉強漬けの日々から一転、 大学で自由を謳歌

高3になってからずっと勉強漬けだった高城さんにとって、大学は別世界。みんながキラキラと輝いて見えた。「車で通学する人やサークル活動を楽しんだり、アルバイトもできる。大学生ってこんなに自由なんだとびっくりしました」

高城さんも、早速サークル活動とアルバイトに精を出すように。サークル活動はサッカーサークルのマネージャーに。「サッカーは好きでよくテレビ観戦をしていました。地元のリーグ戦で試合をしては打ち上げで飲みに行くという毎日で、とにかく楽しかったですね」。アルバイトは、自分がお世話になった塾で塾講師として雇ってもらった。「それが厳しくて」。自分の指導の結果が、ダイレクトに生徒の成績につながるので、気楽にやるわけにはいかない。さらにこの塾では、生徒に勉強を教えるだけでなく、担当している生徒の学習状況の報告書を年に2回提出することを課せられていた。しかも、論文の体裁で仕上げなければならず、提出前の1カ月は報告書作りに掛かり切りになった。「でもこの経験が、大学のレポートや論文を書



中学2年生の頃。剣道部で地区の団体戦に優勝し表彰された。練習は厳しかったが、戦って勝つことの楽しさを知ることができた。

くときに役立ちました」

サークルもアルバイトも充実し、さて肝心の勉強は…。「不真面目な学生でしたね。しかし小心者なので、100%遊びには振り切れず、単位を落とさない程度には勉強し、ぎりぎりのところで卒業できたと思います」

微生物の研究に没頭する

大学の授業の中で特に興味を持ったのは、微生物。「意思を持たない小さな生き物が人間や地球環境に影響を及ぼしていることが面白く、もっと学びたいと思いました」。3年の終わりに希望を出し、第一志望の鈴木智則先生の研究室に配属。「浄化槽に微生物を定着させることで汚水を分解し浄化する仕組みを研究しました。微生物が汚水を分解することはわかっていますが、どのように分解しているかすべてが解明されているわけではありません。そこを微生物学や分子生物学の手法を使って解析していく研究です。私はその中でも、真核生物（細胞の中に細胞核を持つ生物）が及ぼす影響を担当していました」

そのまま修士課程でも研究を続け、その結果は、高城さんと数人の学生によって「循環型モデル浄化槽における細菌および真核微生物の有機物分解能と微生物叢の変動解析」という論文にまとめられている。

大学やその後の大学院で研究者として過ごした経験は、高城さんにとって貴重な経験になったという。「大学で授業を受けることと、研究室で、自分で研究するのは大きく違う。先生や先輩に助言をいただきながらではありませんでしたが、自分で実験の準備をして、結果を考察し、うまくいかなかったことを改善して、また実験し、最終的にレポートにまとめる。自分で最



大学4年生のとき、卒業研究発表会で。他の研究室の教授等、たくさんの方の前で自分の研究内容を聞いてもらうのは初めての経験だったため、とても緊張した。

初から最後まで責任を持つという経験を何度もしたことが、後に社会人になって役に立ちましたね。結果的には微生物とは全く異なる分野の仕事に就きましたが、実験のプロセスも会社の仕事も基本的に流れは同じ。研究室での経験は社会人になってから役に立ちました」

修士課程では、自分探しをしつつ 研究に没頭

実は高城さんは、修士課程に進む前に、経験のため就職活動にトライしている。「何になりたいかがわからず、苦しみました。修士課程の2年間で自分の進むべき道が決められるのかという不安もありました。それ以前に、ちゃんと研究をして成果物を出さなければ卒業させてもらえないので、緊張感を持って2年間を過ごしていました」

しかし、研究室自体は楽しかった。「年1回のゼミ旅行や、先生の趣味である登山に誘っていただいたり、イベントも多くて楽しかったですね。私は優秀な学生ではありませんでしたが、鈴木先生のおかげで卒業することができたと思います」

やりたいことが見つからないまま就職活動 決め手となったのは職種ではなく、直感

就職活動では、特に強い目的意識がなかったため、まずはいろいろな職種にアプライした。「1つは研究開発職、もう1つは、微生物について研究してきたので食品工場の品質管理部門、そして、システムのことは全くわかりませんでしたが、システムエンジニアになった先輩もいたので、システムエンジニアの仕事



大学院修士1年生の頃。鈴木研究室のゼミ旅行で、沖縄へ。みんなでシュノーケリングをしたり、首里城を観光したり、先生とも親睦を深めることもできてとても楽しい思い出になった。

も視野に入れました」

まず、採用試験の時期が早い研究開発職からトライしたが、1つのことを深く探究する研究職という仕事が自分には向いていないと悟り、早々にあきらめた。次に品質管理の仕事。これは、そもそも募集が少なく狭き門だったため除外。残ったのはシステムエンジニア。「企業訪問をして話を聞くうち、真面目で地道な仕事が好き人が多いと、自分に合っているかもしれないと直感しました」

システムエンジニアにもいろいろジャンルがあるので、もともと興味があった食品系のシステムに関わることができる会社に絞りを、日立フーズ&ロジスティクスシステムズを見学。「ここなら働けそう!と思いました」。決め手となったのは、職種よりも直感だった。内定を経て採用が決定。晴れて入社となり、現在9年目となる。

「最初の6カ月は研修で、システムについて丁寧に教えてもらいました。その後、希望して食品系のシステム部門に配属され、先輩について生産管理システムや、ECサイトのシステムなど、様々なジャンルのシステム開発を経験しました」

入社2年目に、小さなシステムの開発を任されて、初めて自分で一からシステムを作る経験をした。「先輩のサポートをいただきながらですが、お客様との打ち合わせも、プレゼンも、設計もすべてが初めてで、緊張の連続。プログラマーが作ったシステムがちゃんと動くのか、最後まで不安でした。無事納品されて、お客様に使っていただき、喜びの声もいただきました。ものすごく大変でしたが、それだけに大きな達成感がありました」

3年目には、2年がかりの大プロジェクトのメンバ

一に抜擢される。「最初は補佐的な役割だったのですが、前任者が抜けて、私がメインでプロジェクトマネジメントオフィス（PMO）を担当することになりました。PMOとは、スケジュールや予算の管理から、スタッフの使うパソコン、お弁当やお茶の手配といった細々した仕事まで担当するいわば何でも屋。とても大変であるにもかかわらず、華やかなシステム開発担当とは違って、誰にも顧みられることのない地味な仕事で、モチベーションの維持に苦労しましたね。それでも2年かけて作ったシステムが本稼働となったときは、みんなでやり遂げたという喜びが大きく、ものすごく達成感がありました。今振り返れば、あれほど大きなプロジェクトに関われることはめったにありません。入社9年目の今になって、地味な仕事の大切さもわかってきました。いい経験をさせていただいたんだなと思っています」

出産、産休・育休を経て新しい部署に復帰

2019年に第1子、2021年に第2子を出産し、計3年間の産休育休の後、昨年4月に復帰した。休業前は、食品関係のシステムを担当していたが、復帰後は、会計システムの担当に。「システムの知識だけでなく、会計学の知識も必要。全く未知の世界なので、また一から勉強中です」

システムについても日々勉強中だ。「ITの進化は目まぐるしく、新しい技術が次々出てくるので、知識を常にアップデートしなければなりません。でも、こつこつ勉強するのは好きなので、苦にはなりませんね」

仕事にやりがいも感じている。

「システムは、何かを便利にするためのもの。お客様のニーズを聞いて、お客様の仕事を楽にし、喜んでもらえることはやりがいにつながっています」

今後の目標はプロジェクトリーダー 他部門のシステム開発にも携わりたい

「システムエンジニアの仕事は、営業職のように



家族で沖縄旅行に行ったときの写真。仕事・家事・育児の全てを完璧にこなすのは難しいので、手を抜けるところは手を抜いて、できるだけ子どもたちと笑顔で過ごすことを心がけている。

『契約を何件取れた！』とか、研究職のように『〇〇を発見した！』といった華やかさはなく、地味な仕事というイメージです。でも、お客様と密にコミュニケーションを取りながら、こつこつとシステムを作ったり、お客様の問い合わせや要望に丁寧に応えていく仕事は、自分には向いていたのかなと思います」と高城さん。

「これまではチームの一員としてシステム開発に関わることが多かったですが、今後は1つのプロジェクトのリーダーをやってみたいですね。システム知識と会計知識を備えた、経理システムの運用ができる人材になりたい。今は食品関係の仕事をしていますが、物流のシステムにも挑戦したい。結局、ずっと勉強しなければいけないですね（笑）」

「振り返ってみれば、これになりたい！という強い想いはなく、部活とか受験とか、目の前の課題を一つ一つ、こつこつとこなしてきただけ」と高城さん。しかし、その積み重ねの先に未来がある。これから進路を考えている若い人たちには、「もし、将来やりたいことが見つからなくても焦らなくていい」とエールを送る。「世の中に仕事は無限にあります。不安になりすぎず、その時その時に興味のあることを大事にしていけば、きっとやりたいことが見つかるはずですよ。ふわふわしていた私にだって見つかったのですから」

取材を終えて

今の若者は、「将来の夢がない」「やりたいことがわからない」という人が多いと言われるが、十数年前に若者だった私もそうだった。これは永遠の悩みなのだ。しかし、今をがんばれば、その先に必ず答えはあるということ、高城さんに教えられた気がする。

(フリーライター／石井栄子)